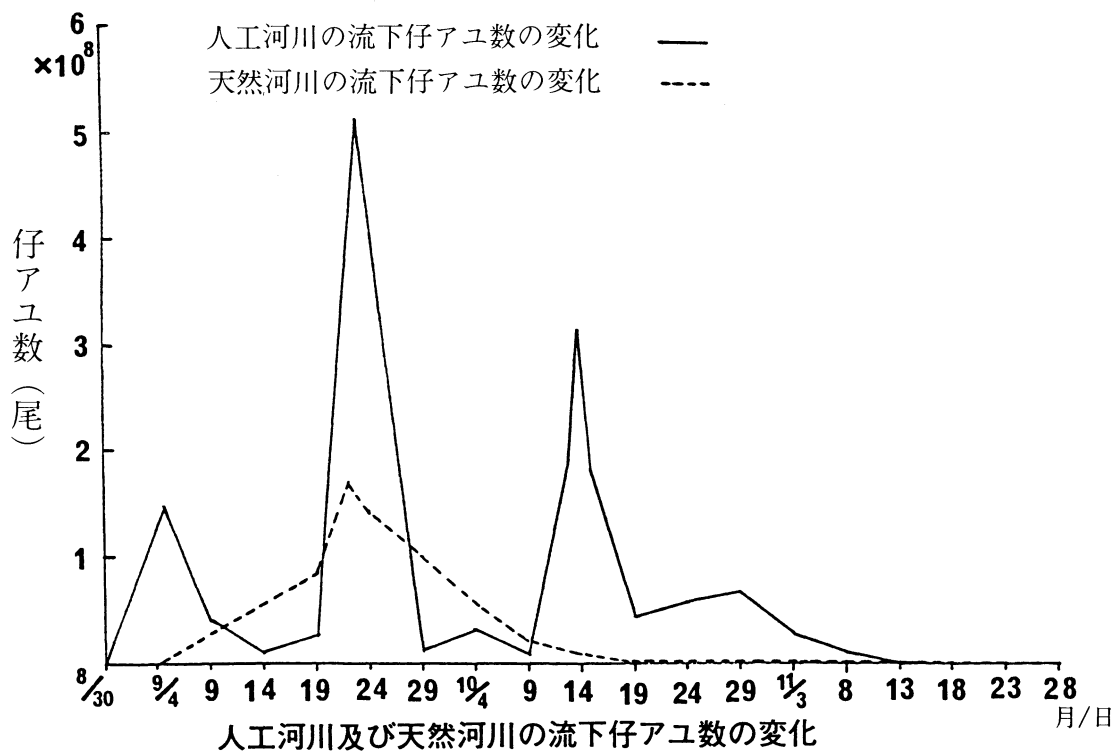


1	事業名	試験研究調査費	予算額	23,600	千円
2	事業細目	(試験研究項目) 資源研究調査費(資源管理技術研究)	予算額	1,653	千円
3	期間	61年度～64年度	予算区分	県単	
4	担当者	里井、岩崎、田沢、氏家、沢田			
5	目的	琵琶湖のアユ資源を管理するために、人工河川及び天然河川からの資源の添加傾向と量、湖中の稚仔アユの分布生態、早期及び晩期の漁獲が資源に及ぼす影響を調査して、合理化な資源管理のための資料を得る。			
6	方法	(1) 仔アユの流下傾向と量的把握のために姉川人工河川では8月30日より10月10日まで17回、安曇川人工河川では9月18日より11月12日まで22回、又天然河川の犬上川では9月4日より11月22日まで16回、姉川では9月4日より11月28日まで10回、時間帯或は24時間の仔アユ採集調査を行なった。 (2) 湖中での稚仔アユの分布生態を把握するために、10月、11月、12月に各月1回、姉川沖、知内川沖、安曇川沖、野洲川沖で夜間曳網により採集調査を行なった。 (3) 稚仔アユの生息環境を把握するために、10月、11月、12月に各月1回、安曇川沖から彦根沖にかけて水温観測とプランクトン量の調査を行なった。 (4) 早期のエリ、沖曳網漁業又沖すくい網漁業がアユ資源に及ぼす影響を調査するために、漁獲資料を収集し、分析する予定である。			
7	結果の概要	(1) 仔アユの流下傾向と量的把握 ア 姉川人工河川の仔アユの流下傾向は、8月30日より始まり、9月上旬と中旬に大きなピークが見られた。調査期間中の総流下仔アユ量は11億5,700万尾であった。安曇川人工河川では9月18日より始まり、下旬と10月中旬に大きなピークが見られた。総流下仔アユ量は39億1,900万尾であった。両人工河川の流下仔アユ量は50億7,600万尾であった。 イ 犬上川(常水河川)と姉川(渇水河川)を天然河川の流下仔アユ量把握のためのモデル河川として調査した。犬上川では4億1,300万尾、姉川では3,870万尾であった。 ウ 犬上川(常水河川)と姉川(渇水河川)をモデルにして、常水河川(知内川、塩津大川、天野川、芹川、野洲川)と渇水河川(愛知川、石田川、和辻川)の総流下仔アユ量を算出すると28億7,400万尾であった。 エ 61年秋の両人工河川及び天然河川からの流下仔アユ量は80億尾以上であると推定される。 (2) 稚仔アユの分布生態 ア 姉川沖、知内川沖、安曇川沖、野洲川沖の4水域の調査結果であるが、10月期では野洲川沖に、11月期では姉川沖に、12月期では野洲川沖に多く分布していた。 イ 採集魚の体型は、10月期では知内川沖、11月期では安曇川沖、12月期では知内川沖が最も大きかった。 (3) 稚仔アユの生息環境 ア 水温は10月期に表層で平年より高目。中層(20m、40m)では平年より低目。11月期、12月期は表層、中層共平年より低目であった。プランクトン量は10月期の表層と12月期の表層と中層で平年より高目であった。			

8 主要成果の具体的数値（図・表 等）



(2) 稚仔アユの分布

水 域	姉 川 沖		知 内 川 沖		安 曇 川 沖		野 洲 川 沖	
	採集尾数	平均体重mg	採集尾数	平均体重mg	採集尾数	平均体重mg	採集尾数	平均体重mg
10	55	6.8	13	24.5	23	11.2	145	10.9
11	194	38.4	95	41.2	17	135.0	102	54.5
12	33	139.1	11	301.9	34	127.6	204	146.6

(3) 稚仔アユの生息環境

水温・プランクトン 月 期	水 温 $^{\circ}\text{C}$			プランクトン現存量cc/m ³		
	表 層	20m 層	40m 層	0～10m 層	10～20m 層	20～40m 層
10	20.36	12.57	7.35	16.98	1.54	0.75
11	14.70	14.47	7.40	19.10	3.00	0.81
12	10.46	10.60	9.50	21.87	4.07	2.71

9 今後の問題点

仔アユの流下傾向と量的把握のための調査では、人手と時間が費り、調査方法の検討を要する。

10 次年度の具体的計画

湖中での稚仔アユの分布生態を把握することを主体にして、調査を継続実施する。